

作家と風土

——『あつかましい人たち』をめぐって——

佐藤 浩子

Les Impudents

—Marguerite Duras au Pays de Duras—

Hiroko SATO

要 旨

デュラスにとっての故郷はインドシナなのだろうか、それともフランスなのだろうか。サイゴン近郊のジア・ディンに生まれたデュラスにとって、インドシナは生まれ故郷であり、17歳の時にフランスに戻るまで生活したこの土地を背景に、デュラスの作品の多くが生まれた。父親の死後、デュラスは母親や兄たちと一緒に父親の故郷で2年間を過ごした。パルダイヤンにある父親の家と広大な土地での生活はデュラスの心に深く刻み込まれ、この土地の風景は少女に強い印象を残し、心の奥底に記憶された。パルダイヤンでの生活は短期間ではあったが、デュラスは処女作『あつかましい人たち』の舞台としてこの土地を選んだ。何故、デュラスは処女作の舞台をインドシナではなく父親の故郷に設定したのか。デュラスにとって、パルダイヤンという土地はどのような意味を持っているのか。パルダイヤンとその土地を舞台とした作品『あつかましい人たち』をとおして考える。

キーワード：インドシナ，土地，父親，フランス，アイデンティティー

I 土地と作品

デュラスにとっての故郷はインドシナなのだろうか、それともフランスなのだろうか。1914年4月4日、サイゴン（現ホーチミン市）近郊のジア・ディンに生まれたマルグリット・デュラスにとって、インドシナは生まれ故郷であり、幼少期から思春期に至る人格形成の重要な時

期を過ごした土地である。デュラスの作品の多くは、17歳でフランスに戻るまで生活したこの土地を背景として生まれた。では、デュラスにとってフランスとは何であったのだろうか。

デュラスの処女作は1943年に出版された『あつかましい人たち』*Les Impudents*である。「処女作にはその作家のすべてが存在する」と言われるが、デュラスの場合も例外ではない。多くの研究者が指摘するとおり、この作品には後の作品の中で展開されるすべての要素が萌芽として含まれている。この作品は後の作品の原型となり、代表作との繋がりと対応関係が見いだされる。一般に『あつかましい人たち』はデュラスにとって作家としての出発点となった作品と評価されることが多いが、デュラスにとってこの作品は果たして単にそれだけの意味しか持っていないのだろうか。

『あつかましい人たち』はフランスの南西、ロッセ＝ガロンヌ県のデュラス地方を背景に、デュラスの町の近郊の農村バルダイヤンを舞台としている。1921年12月4日に父親が亡くなった後、デュラスは母親や兄たちと一緒に父親の故郷バルダイヤンにあるプラティエと呼ばれる土地と屋敷で1922年から24年までの2年間を過ごした。バルダイヤン村やドゥロ川溪谷の風景は当時8歳の少女であったデュラスに強い印象を与え、プラティエの屋敷と庭園、そして農地を含む11ヘクタールにも及ぶ広大な土地での生活は彼女の心に深く刻み込まれた。

バルダイヤンでの生活は短期間であったにもかかわらず、デュラスは処女作の舞台としてインドシナではなく父親の故郷を選んだ。デュラスがバルダイヤンという土地を処女作の舞台として選んだことはどのような意味を持っているのであろうか。「舞台となった土地」をとおして土地と作品、そして土地と作家との関係を考えてみよう。

II 「忘れられた小さな王国」

8歳のデュラスが母親や兄たちとともに2年間を過ごしたバルダイヤンは、フランスの南西、ロッセ＝ガロンヌ県のデュラス地方にある小さな村である。

デュラス地方はボルドーから東に85キロ、ドルドーニュ県とジロンド県に隣接する地域で、ケルシーとガスコーニュにも近い。石灰質の少ない土壌に恵まれたこの地方は、中世以来の葡萄畑が広がり、こくのある赤ワイン「コット・ド・デュラス」の産地である。「何世紀も前からこの地方で栽培されている葡萄は、もはや過去の名声を失っていた。しかし村人たちは、名前だけは有名になった近県のどんな酒よりも、ここの地酒を上等だと誇っていた¹」。またドゥロ川とロット川の流域に広がる丘ではプラムが、ドゥロ川流域では19世紀以来タバコが栽培されている。

デュラスの町は広大なドゥロ川溪谷に面し、周囲を見下ろす海拔120メートルの台地山脈の上に位置する。11世紀末にデュラス地方の最初の領主となったブゾーム子爵がこの町を創設した。現在のデュラスの町は12世紀末か13世紀初頭に成立し、現存する城塞は1310年に法王の甥ベルトラン・ゴットが建設したもので、1680年にデュラス公爵が別荘に改築した。デュラスは次のように描いている。

オステルの城塞は13世紀にさかのぼる。城塞は50キロ四方にわたってその地方を見下ろし、長い間オー＝ケルシーの最も権力のある領主の領土であった²。

デュラスの町はこの地方の中心地で、フランス南部によく見られる中世の城塞都市として「忘れられた小さな王国」³の雰囲気漂わせている。

父親の故郷パルダイヤンはデュラスの町から6キロの小さな村である。デュラスの父親アンリ・ドナデューが手に入れた土地は、この村でプラティエと呼ばれている。屋敷はこの地方でよく見かける修道院風のものではなく、どっしりとした頑丈な細長い家で大家の趣がある。屋敷の敷地は、手前が道路まで傾斜した広大な庭園で、裏手は農地が遠くの小さな谷まで続いている。デュラスはこの屋敷を次のように描いている。

ユドランの古い家は、道が曲がっているため半分見えなくなっていた。大きすぎてほとんど使い物にならないその家は、鎧戸の付いた背の高い窓が所々にきちんと並んでいるむき出しの壁をさらしていた。[……] 実際は、その家はまだ十分長持ちする建物だった。パルダル村の裕福な農民が建てたもので、その中には農民たちの忍耐力と経済力が集約されていた。パルダル村では、17世紀末のその建物の費用は5人の兄弟姉妹が持ち寄ったものだと言われていた。その後かなりたってから、あるブルジョワがその土地を買い、家の周りの庭に木を植えた。[……] この家には10家族は入れるであろう⁴。

プラティエの屋敷で亡くなったデュラスの父親アンリ・ドナデューは、1872年4月9日、ロッセ＝ガロンヌ県のヴィルヌーヴ＝シュール＝ロットに生まれた。土地の師範学校を卒業したアンリは教職に就き、同郷のマリー＝アリス・リヴィエールと結婚、2人の息子ジャンとジャックをもうける。その後1905年にサイゴンでの任務に就くため家族とともにインドシナに赴く。サイゴンの地で妻アリスを病気で亡くした後、やはり同じ目的でインドシナに渡った北フランスのパ＝ド＝カレ県出身のマリー・ルグランと再婚、3人の子供ピエール、ポール、そし

てマルグリットをもうける。パルダイヤンにあるプラティエの屋敷は、アンリ・ドナデューが妻と子供たちのすべてを一同に集めるために、家族の団らんを夢見て手に入れた家であった。

Ⅲ 「憧憬の土地」

心の奥底に刻銘に記憶されたパルダイヤンでの少女時代の体験を、デュラスは作品の中でどのように展開しているのでしょうか。この土地で繰り広げられた様々な人間模様、そしてヒロイン、モーの心の葛藤は土地の風景とどのように繋がるのでしょうか。ヒロイン、モーの眼をとおして描かれるパルダイヤンの風景を見てみよう。ペクレス家での夕食が終わり、モーが一人外に出ると、彼女の目の前にユドランの黄昏の風景が広がっている。

ユドランとかつての小作地がその中央を占めている傾斜地の頂では、パルダル村のいくつかの農家が粗末な石油ランプを瞬かせていた。穏やかな夜で、時折、一陣の風が吹くだけだった。モーはその時までこの風景をよく思い出せなかったが、今はそれがすっかり蘇った。自分のまわりに、モーは段をなして重なる大地、畑、農場や村、ディオール川を感じた。それらはあたかも調和のとれた永遠の秩序の一部を、世界のこの小さな片隅を行ったり来たりするだけの人間よりも存続することが確かな秩序の一部をなしているようであった⁵。

ペクレス夫人は、息子のジャンとモーの結婚を考える。一方、モーは、夕食会で出会った金持ちの青年ジョルジュ・デュリュユーに一目惚れし、ジョルジュも彼女に関心を示す。モーの見た夏のわか雨の風景はすべての人間模様を象徴しているかのようである。

小作地のまわりでは、霰のような大粒の雨が激しく降っていた。雨が水面に穴をあけているくすんだ緑色の池に、中身がほとんどなくなった二つの乾草の山が影を映していた。雨は夏のもの憂い風情をさらに際立たせていた。こんもりと繁った樹木の葉むら、どんよりとよどんだ暑さ、落果の腐りかけた果肉で被われた並木道、これらは夏の豊饒を示していた。玄関の庇の下では、スイカズラの微かな香りが、濡れた砂岩の匂いや驟雨のほのかに塩気を含んだ微妙な風味と混じって漂っていた。遠くには、ユドランの屋根から幾本もの煙突が突き出て、樅木の梢がそれを悠然ととり囲んでいた⁶。

モーとジョルジュは互いに愛を告白し、モーは自分の意志でジョルジュに身を任す。愛の成

就は「風に吹かれて木の葉が木からはがされ、運ばれて行き、最後には死の欲望を成就するのに似ていた」⁷。ジョルジュとの愛の成就是、身体と心の深い調和であり、心身の「共犯関係」であった。痛みと快樂と熱気に包まれたモーの眼に夕方のディオール川の風景が映る。

窓ごしにディオール川が遠くに見える、川面からは茨の茂みの燃えるような湯気が立ち、あたかも昼間、大事に蓄えた蒸気を、夕方になったら発散するかのよう、谷間全体に恵みの湿気をもたらしていた⁸。

ジャックはモーの情事を許すことができない。家族の中に占める地位が奪われ、妹が優位に立つことを許せない兄。そこには兄妹の確執と嫉妬が存在する。家族の中で孤立したモーは家を出る。幼友達ルイズ・リヴィエールがボルドーから戻っていることを知ったモーは彼女に会いに行く。ルイズを待ちながら夕暮れの畑に佇むモーは、田園の真ん中で一人夢に耽る。

リオートル川の対岸では、ユドランの小作地やパルダル村の煙突が煙を吐き出し、静かな空にゆらゆらと立ち昇っていた。煙は空高くいったん昇ると、斜めに方向を変えて、村を見下ろしている櫛の森の上を這って行った。[……]

モーは夕暮れの中から湧き上ってくるこの心地よさはいったい何なのかと自問した。それはモーの心にとっても痛く感じられた。

彼女は少女時代を過ごしたその風景を見るときも眺めていた。威厳に満ち、簡潔な構成を持つ、教会の身廊のように高い樅の林。薄い刃のように草原の下の方に入り込むリオートル川。谷間の端まで被う足早の流れの微かなささやきが聞こえてきた⁹。

モーはジョルジュと暮らす、二人の関係は次第に悪化する。モーは悲しみに沈み、部屋からポプラと麦畑の風景を眺める。

事実モーは、この風景なしでは生きて行けないのだ。その一部はここからは見えないが、遙か彼方の地平線まで及び、ディオール川の向こうにはポプラの木が繁る平らな光り輝く土地がある。日によっては、強い日差しのため文字通り麦畑から湯気が上がり、縦に大きく伸びた霧となって虹色に輝き、その霧をとおして風景が涙をこぼしているように見えるのだった¹⁰。

この小説はデュラスの作品の中では珍しく、「ハッピー・エンド」の結末を迎える。それは「世界のこの小さな片隅」に生きる「あつかましい人たちが」、家族との葛藤がいかに激しくとも、「家族の絆」を持ち続けることへのデュラスの願望であったのであろう。

秘かな連帯感が奥深いところで皆を結びつけ、本当の家族を構成していた……
そしてモー自身も彼女がどんなことをしようとこの一族の一員なのだ¹¹。

少女の頃に過ごしたフランスでの2年間は、インドシナでの年月と同じように、時にはそれ以上に重要な意味をデュラスに与えた。父親が亡くなったこの家での母親と兄弟との生活は、デュラスにとって最も幸福な時期であった。デュラス地方の、パルダイヤン村の風景の中には家族のすべてが刻み込まれている。パルダイヤンにあるプラティエの屋敷は「家族の原型」としてデュラスの心に残った。パルダイヤンはインドシナに生れたデュラスにとって「憧憬の土地」、何にも代え難い重要な土地であった。

フランス、それはパルダイヤン、エクリチュール、それはデュラスの人生。デュラスが書くことを仕事にし、最初の本の出版を決心する時、彼女は父親の名前ドナデューを棄てデュラスを選ぶ。父親の家がある町の名前、そして処女作『あつかましい人たち』の舞台に父親との絆の土地を選ぶ¹²。

土地への思いが作家生活としての出発点となる。そしてデュラスという土地の名前は作家のペンネームとなる。パルダイヤンはフランスとの繋がりを求める接点の場所、フランスと作家デュラスを繋ぐ原点である。パルダイヤンのこの土地を処女作『あつかましい人たち』の舞台としたことは偶然ではない。パルダイヤンという土地への愛着と執着がいかに強かったかを示している。つまりこの作品には、多くの研究者が述べていた一般的な評価以上の意味があったと言えよう。

Ⅳ デュラスとフランス

1914年、サイゴン近郊のジア・ディンで生まれたデュラスは、3歳の時、父親がハノイの小学校の校長に任命され、サイゴンを後にする。ハノイの後、父親はプノンペンに転勤を命じられ、手に入れたばかりの家をハノイに残したまま、一家は1920年12月31日にプノンペンの

新居に移る。幼少期のデュラスは、両親の任地先が代わる度にインドシナの主要な都市を転々と移動していた「流浪の民」であったと言っても過言ではない。

その上、デュラスの父親は風土病にかかり、亜熱帯性の気候、豪雨の季節風、ジャングルの乾燥と湿気による無気力、しょう気、そして腸の合併症に苦しんでいた。父親は家に不在の時間が多く、家族は母親と二人の兄たちであった。父親はフランス人としての威厳を保ち、家族に植民地での白人としての生活を求めたが、父親がいなくなると子供たちは現地の子供たちと同じ生活に戻った。母親はフランス人であったが、デュラスと兄は「痩せた黄色い肌をした安南人の子供」であった。

兄と私は痩せた小さな子供だ。白人というより黄色い肌をしたクレオールの子供だ。汚らしい安南人の子供、と母は言う。〔……〕母はマンゴーをとっても好きというわけではなかった。痩せた小猿の私たちは違う、昼寝の信じられないような沈黙の中で母が眠っている間に、母とは人種が違って、私たちはマンゴーでお腹を一杯にする。こうして安南人になってしまう、兄と私は。母は私たちにパンを食べさせることを諦めている。お米しか好きじゃない。外国語を話す。裸足だ。母は年を取りすぎていて、もう外国語の中に入っていけない。私たちは勉強もしないのに話せる。母は靴を履いている。またある時、母は帽子をかぶらずにいて日射病にかかってしまう。そして母は錯乱して、北国に、小麦と生の牛乳と寒さの中に戻りたいとわめく。黄色い肌の私たちはこんなに痩せているのに太陽は平気だ。〔……〕15歳の頃、あなたたちは本当にお父さんの子供なの、と尋ねられた。鏡で見てごらんなさい、あなたたちは混血児よ。〔……〕ある日、母は私たちに言った、リンゴを買ってきたよ、フランスの果物だよ、おまえたちはフランス人なのだからリンゴを食べなければ。食べようとしても吐き出してしまう。肉、これも吐き出してしまう。塩漬けにしてからニョクマムで味を付けた魚しか好きじゃない¹³。

クレオールは特に西インド諸島生まれの白人をさすが、転じて植民地生まれの白人を意味する。当時のフランス人が白い服を身に付け、白人居住区で生活していたのに対し、デュラスは現地の子供たちとまるで変わらない生活を送っていた。デュラスはインドシナにおけるフランス人というよりベトナム人であった。だが、デュラスは両親がフランス人である植民地生まれのクレオールである。クレオールとしての立場に置かれていたデュラスは、アイデンティティーを持たない中間的な存在でもあった。揺れ動く心理とともに、「私は一体何人なのか」というアイデンティティーの問題に常に直面していた。デュラスは自分自身に「私はフランス人なのだろうか」という疑問をいつも投げかけていたのではないだろうか。デュラスにとって定住

の地はどこであったのだろうか。

「書くこと」を仕事にしたデュラスは「根を持たない人間」,「根源のない人間」の状態を描き続けた。フランスのみならずインドシナにおいても定着できない人たちが常に描かれる。デュラスは「流浪の民」であった自分と同類の人間を描いた。それは自分の「不在感」の反映,「飢渴感」の反映であり,フランスへの憧憬と執着の表れでもある。『あつかましい人たち』の中で主人公の感情と自然との一体感を強調しているのは,デュラスのフランス人としてのアイデンティティーを確認したかったことに他ならない。デュラスはフランスに対する思いを,フランス人であることを「書くこと」をとおして主張したかったのである。母親が希望した数学の教師にはならず作家になった意味も,そして母語であるフランス語への執着もそこに見ることができる。デュラスは「根」を求め続けた作家,ルーツを求め続けた作家である。

1958年頃,デュラスは『太平洋の防波堤』の映画化の権利をルネ・クレマンに譲渡した時に得た報酬で,パリから西に50キロ,ノーフル＝ル＝シャトーに家を購入する。デュラスの作品の多くがこのノーフル＝ル＝シャトーの家で執筆されたのである。

この家は私のものになり,私の名義になった。買った時期は,書く狂気に取り憑かれる前だった。それは一種の火山活動みたいなものだ。この家はそのことと大きな関係があると思う。少女時代のあらゆる苦勞をこの家が慰めてくれた。家を買ってすぐ,私にとって重大なこと,決定的なことをやったのだと分かった。私自身にとって,そして私の息子にとって重大なこと,それは私の人生で初めての経験だった。[……] この家は書く家になった。私の本はこの家で生み出される¹⁴。

ノーフル＝ル＝シャトーの家はデュラスにとって象徴的な意味を持っていた。この家を手に入れたことで,デュラスはフランスとの絆を一旦は取り戻した気持になったのである。しかし,デュラスのパルダイヤンへの思いは断ち切れなかった。デュラスは,母親がパルダイヤンの屋敷を人手に渡した時のフランスとの絆が断絶されたような思いを忘れることはできなかった。結局は経済的な理由でかなわなかったが,1965年にデュラスはパルダイヤンにあるプラティエの家屋敷を買い戻そうとしている。さらにデュラスは死の4年前,1992年に父親が埋葬されている墓についてパルダイヤンの村役場に問い合わせている。パルダイヤンは父親とデュラスを繋ぐ接点であった。デュラスは,父親の亡くなったプラティエの屋敷に「父との心の絆」を求めていたのである。デュラスはパルダイヤンの土地への執着を最後まで捨てることはなかった。

作家と風土

デュラスはパルダイヤンという土地をとおしてフランス人アンリ・ドナデューの娘であり、自分がフランス人であることを確認したかった。デュラスの土地への思いと執着は、デュラスが生涯をとおして求めていたアイデンティティーの問題に帰着する。その意味で、『あつかましい人たち』は、デュラスにとって単に出発点であるというよりは、作家としての原点ともいえるべき作品であったと言えよう。

佐藤浩子



デュラスの町と城

作家と風土



パルダイヤンにあるプラティエの家



ノーフル＝ル＝シャトーの家

注

- 1 DURAS, Marguerite: *Les Impudents*, Plon, 1943. Gallimard, Folio, 1992, pp. 45–46.
- 2 *Ibid*, p. 45.
- 3 VIRCONDELET, Alain: *Marguerite à Duras*, Edition 1, 1998, p. 21.
- 4 *Les Impudents*, pp. 163–164.
- 5 *Ibid*, p. 54.
- 6 *Ibid*, pp. 91–92.
- 7 *Ibid*, p. 136.
- 8 *Ibid*, p. 141.
- 9 *Ibid*, p. 174.
- 10 *Ibid*, p. 186.
- 11 *Ibid*, p. 175.
- 12 ADLER, Laure: *Marguerite Duras*, Gallimard coll. nrf Biographie, 1998, p. 43.
- 13 DURAS, Marguerite: *Outside*, Albin Michel, 1981. P. O. L, 1984, pp. 277–279.
- 14 DURAS, Marguerite: *Ecrire*, Gallimard, 1993, pp. 29–30, p. 20.
DURAS, Marguerite: Prologue, *Maisons d'Écrivains*, Editions du Chêne, 1995, p. 14, p. 16.